言語獲得にみられる事態把握と場の言語学

櫻井　千佳子
（武蔵野大学）

日本語と英語の事態把握の違い

- 「する」と「なる」　（池上　1981）
- 「ある言語」と「する言語」　（金谷　2004）

言語獲得研究で事態把握をみる

- 「異なる言語の話し手は、言語を獲得していくプロセスにおいて、異なる事態把握をするようになるのだろうか」
  - 言語間で比較
  - 発達段階の比較

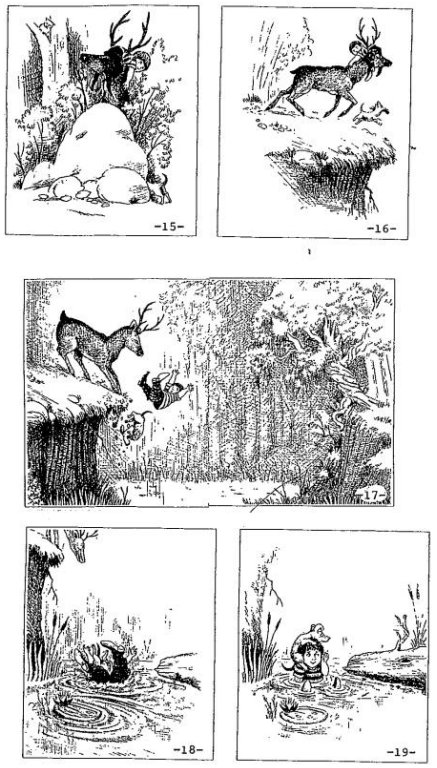
同じ事態を表現するデータの比較

- 日本語
  - 「なる」、「ある」なのか。
- 英語
  - 「する」なのか。

Frog Story の研究

- Berman and Slobin（1994）
- “Frog, where are you?” (Mayer, 1969)　文字のない絵本
- ナラティヴの言語間の比較・発達段階を追っての比較
- “thinking for speaking”

Frog Storyのシカのシーン



Mayer, M. (1969). Frog, where are you? New York: Dial Press.

9歳児のデータ

- (1) Then it turns out they're a deer's antlers, so- and he gets- he lands on his head and he starts running. And he tips him off over a cliff into the water. And he lands. [9;5]
- (2) 男の子はいたずらをしていたのですが、シカを怒らせてしまい、池の中に落 ちてしまいました。[9;9]

5歳児のデータ

- (3) And this time – male deer got the um – the boy and threw him over a cliff into a pond. [5;10]

- (4) 男の子がシカにのっかっていて、沼におちてしまいました。[5;10]

3歳児のデータ

- (5) A reindeer!　And then they all splash into the water. [3;9]

- (6) シカがずっといってて、男の子とわんちゃんがびしょぬれになっています。 [3;11]

英語と日本語のデータ

N=20	英語			日本語		
	他動	存在	言及なし	他動	存在	言及なし
3 歳	3	5	12	0	10	10
5 歳	14	5	1	5	15	0
9 歳	17	3	0	8	12	0
成人	16	0	4	13	7	0

事態把握の発達

- 9歳児、5歳児：
  - 英語：　他動的関係が明示される傾向
  - 日本語：その出来事の結果に注目し、他動的関係が必ずしも明示されない傾向。

- 3歳児
  - 英語も日本語も他動的関係が明示ない傾向にある。

事態把握と場の言語学

- 場の言語学
  - 言語の話し手は場に依存して場の中に存在する。
  - その場所で起こった出来事をまるごとに捉えるものである。

場所的な捉え方＝日本語の論理か？

- 思考が基底的で、個の思考がある（岡　2013）
- 言語使用の基底には、日本語においても英語においても、言語の話し手が場の中に入り込み出来事を捉えるという場所的思考がある可能性。

参照文献

- 池上嘉彦（1981）『「する」と「なる」の言語学』大修館書店
- 井出祥子（2006）『わきまえの語用論』大修館書店
- 岡智之（2013）『場所の言語学』ひつじ書房
- 金谷武洋（2004）『英語にも主語はなかった』講談社
- Berman, R. A., & Slobin, D. I. (1994). Relating events in narrative: A crosslinguistic developmental study. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Mayer, M. (1969). Frog, where are you? New York: Dial Press.